

パリ大都市圏におけるニュータウンの現状と将来 —とくにエヴリー・ニュータウンの事例を中心にして—

高 橋 伸 夫

- | | |
|------------------------|-----------------------------|
| I はじめに | IV エヴリー・ニュータウンの居住者特性 |
| II フランスのニュータウン | IV-1 人口特性 |
| II-1 パリ大都市圏内の5つのニュータウン | IV-2 就業人口の特性 |
| III エヴリー・ニュータウン計画の特性 | IV-3 通勤行動の特性 |
| III-1 エヴリー・ニュータウンの誕生 | V エヴリー・ニュータウンの課題 |
| III-2 エヴリー・ニュータウンの主要機能 | VI エヴリー・ニュータウンの将来像—むすびにかえて— |
| III-3 エヴリー・ニュータウンの生活空間 | |

I は じ め に

ニュータウンは、そこに住む人々の理想とする空間を表出する。そのため、ニュータウンを分析することによって、上記のようにまずもって人々はいかなる都市空間を創造しようとしたかのプロセス、建築されたニュータウンと母都市との相互関連、ニュータウンとその周辺地域、ひいては国家的都市システムにいかに位置づけられるか等々について検討できよう。

本稿の題目と本文中に使用するニュータウンは、勿論、英語である。フランス語では、ヴィル・ヌヴェル（ville nouvelle）である。しかし、日本では、定義は一定しないが、1946年のロンドン大都市計画の一環としてニュータウン法（New Town Act）の制定に基づいて造成されたような計画的都市であり、政府をはじめ公的資金を使用し、住宅のみならず就業の場にも計画されたものを、一般的には、ニュータウンなる用語として使用されてきた。さらにこの用語を限定しなくてはならない。フランスのヴェルサイユの例をあげれば明確なように、都市の長い歴史にはヴィル・ヌヴェルと呼称できる都市が存在してきた。しかし、本稿では上述のイギリスの例にみられるように、第二次世界大戦後に誕生したものに限定して考察したい。

イギリスのニュータウンは、1980年代でほぼ完成した。そのため、その建設過程、計画内容、さらにはその評価に至るまで日本に紹介された研究報告¹⁾は多い。しかし、フランスは、イギリスに遅れてヴィル・ヌヴェルの計画を打ち出し、いまなお建設中である。そのため、その計画については日本で報告されてきたが、数が少なく²⁾、その建設状況、将来像に至るまでの研究成果はない。

本稿は、フランス大都市圏のうち、とくにパリ南郊のエヴリー・ニュータウンを事例にして、その住民特性・就業構造からみた地域的内部構造、通勤行動による他地域との結合関係、現時点での課題、さらには将来に向けていかなる計画を有しているかを解明したい。エヴリー・ニュータウンをとくに

取り上げるが、そこに生起する諸問題や将来像は、少なくともパリ大都市圏の他のニュータウンにも適合するものであり、その他のフランスのニュータウンを理解する上でも参考になるであろう。

前述のように、日本では「ヴィル・ヌヴェル」なる用語は慣用されていないため、本稿ではニュータウンなる英語を使用する。本調査は、文部省・科学研究費「国際学術研究」による研究課題「パリ大都市圏の構造変容に関する地理学的研究」の第二年度（平成6年度）の一環としてなされたものであり、主な現地調査は1994年7月に実施された。文献・統計・資料等の収集は、現地とともにパリ市でも入手したものである。

Ⅱ フランスのニュータウン

フランスにはニュータウンが9つある。そのうち5つがパリ大都市圏に位置している。他の4つは、フランス北部のリール・エスト、ルアン近郊のル・ヴォドゥライユ、リヨン東部のイル・ダボー、そしてマルセイユ近郊のリヴ・ドゥ・レタン・ドゥ・ベールである。

今日のパリ大都市圏におけるニュータウン計画の主要な骨格は、1965年のパリ大都市圏のマスタープランから登場した。シャルル・ドゥ・ゴール大統領の時代に、パリの急成長を解決するために、二つの案が検討された。一つは、パリから約100キロメートル離れたオルレアン、ルアン、アミアン、ランスなどの諸都市を計画的に成長させることであった。第二には、イギリスのニュータウン計画をフランスにも導入することであり、パリ市から20～30km圏に「新しい核」を誕生させることであった。議論の末、後者が選ばれたという歴史がある。

上記の1965年のマスタープランのニュータウン計画は、きわめて意欲的であり、計画人口50～100万、そしてパリ大都市圏には9つ建設するものであった。しかし1969年のマスタープランの改訂案は、パリ大都市圏のニュータウンは5か所に減少させ、計画人口も30～70万に変更された。

1979年のマスタープランでもニュータウン構想が議論されていたが、内容が大きく異なっていた。とりわけ初期のニュータウンは、建築密度の比較的高い市街地を有する都市らしい都市として、周辺地区に対しても地域再編の中心核となることが期待された。後期のニュータウン計画においては、これとは逆に低密度に拡散する計画に変換した。都市とはいえ、実際には小規模な住宅地区が分散的に配置されているにすぎず、その中で個人住宅の建設が進められた。

1976年のマスタープランを再び改訂する作業がパリ地域議会で1978年11月に始められた。この改訂においても、ニュータウンの目標規模はさらに縮小され、10～30万の計画人口になった。以上のように、パリ大都市圏のニュータウン計画は、その数、計画人口をつねに縮小する歴史を繰り返してきた。

第6次の1970年の計画の際にニュータウンに対する基本的な目標は以下の4つであった。

1. 郊外地域の再編成の核を目指し、雇用、居住、諸施設、サービス活動等の成長の極を創造しながら市街地を形成していく。
2. 通勤流動を減少させ、当該市街地内において交通問題を解決するようにする。
3. 職住近接を実現できるような真の都市を建設し、雇用と住宅に多様性を持たせ、都心地区を創造する。環境や余暇に対しても配慮し、ニュータウン地区外からの人々を吸引する。

4. 実験的な試みとして、地域整備や都市計画の諸概念を実施する。

以上は、当初の目標であったが、その後20年間に以下のような実現がなされた。

都心地区の建設は、いずれのニュータウンにとっても最も重要なことであった。都心地区なくしてはニュータウン建設を考えることはできず、同様に大都市の郊外地域の再編成がなされた。とくに、パリ近郊のマルヌ・ラ・ヴァレやリール・エストがその典型であった。エヴリー・ニュータウンの中にエソンヌ県庁を建設し(1971年完成)、ヴァル・ドアズ県の県庁はセルジー・ポントワーズ・ニュータウン内に新たに設けられ、リール・エストとマルヌ・ラ・ヴァレも続いた。

都心地区の建設という試みは成功した。都心地区を早い時期に建設したニュータウンは、人々に満足感を与えることができ、そのイメージは上昇した。都心地区に成功した、例えば、リヴ・ドゥ・レタン・ドゥ・ペールは人々を吸引することをなしとげ、都心地区を比較的限定させたイル・ダボー、ル・ヴォドライユは、人々にはあまり人気がない。

サンカンタン・アン・イヴリンヌでは、都心地区は当初きわめて成功していたが、1980年代には、その地区の吸引力の欠如のために、諸活動は停滞気味である。一方、(ムラン・)³⁾セナールは都心地区のティジエリー・リュザンの建設の遅れに悩み続けてきたが、完成すれば予想されたような中心地になるであろうと考えられている。

注目すべきことは、人々の休暇活動に向けたオープンスペースの創造である。たとえば、池や水上スポーツなどである。セルジー・ポントワーズはセヌ川のわん曲部を利用し、サンカンタン・アン・イヴリンヌではサンカンタン・アン・イヴリンヌ池、エヴリーではヴィリー・グリニ池、マルヌ・ラ・ヴァレではマルヌ川沿いのヴェールとジャブリンヌ余暇基地、ル・ヴォドゥライユのポズ・トゥールヌド、イル・ダボーのファラヴィエとサン・ボンネ池、リヴ・ドゥ・レタン・ドゥ・ペールの池、等々である。

リール・エストのニュータウンの中央地区には、公園が存在し、(ムラン・)セナールではルージュオー林地の保護と整備がなされている。セルジー・ポントワーズの中央地区は、オワーズ川のメアンダーに位置し、レクリエーション地区が整備され、一方、住宅地区をはじめとする市街地は馬蹄型に広がり、この自然環境保護とレクリエーション地区の創造の概念は、ニュータウン建設に重要視されている。

雇用の場の創造と労働者の均衡に関しては、イギリスの田園都市とニュータウンとは異なっている。フランスのニュータウンは、現地で就業しなくとも、居住することを企図している。逆にニュータウンに居住して、他に通勤することも想定されていた。しかし、ニュータウン内に居住人口のための雇用を創造するための努力は続けられている。ニュータウンに居住する幼少人口や今後誕生する人口に対しては、現地で就業するような自立化を高めることが課題である。

この完全な自立化は、ニュータウンの建設当初から期待することが無理であった。それは、いずれのニュータウンも大都市に近接し、高速道路や鉄道網で結合されていることである。この目標はすべてのニュータウンにおいて、1975年に確認された。

ニュータウンと他の大都市との近接性に関しては、パリ大都市圏で問題視された。ただし、エヴリー

とマルヌ・ラ・ヴァレではあまり問題にならなかった。ニュータウンの位置を決定する際に大きな議論が生じ、予想通りの結果となった。すなわち、大都市との低近接性や孤立したニュータウン、たとえば、ル・ヴォドゥライユ、イル・ダボー、（ムラン・）セナールなどは予想したように建設が進捗していない。

そして、ニュータウン計画と建設計画に最大限に柔軟性が導入されている点である。たとえば、セルジー・ポントワーズ・ニュータウンは、県庁の完成前には単なる二次的中心地であったが、現在では主要な中心地になっている。マルヌ・ラ・ヴァレ・ニュータウンはパリから最も遠隔地の第4地区に、『ユーロディズニーランド』の建設用地を確保した。（ムラン・）セナールニュータウンは、中心地区を建設するために、ティシエリー・リュウザン地区に2,000ヘクタールの土地を買収しようとしている。それは、従来のムラン市の中心地区に対する非難に対応するためである。ル・ヴォドゥライユも計画の原理を変更せざるを得なくなり、成長の極となる「都心核」の創造に注目し、これはイギリスのミルトン・キーンズ・ニュータウンの模倣であった。

II-1 パリ大都市圏内5つのニュータウン

第1表から第4表までは、パリ大都市圏に位置する5つのニュータウンに関して相互比較とその概略を示している。

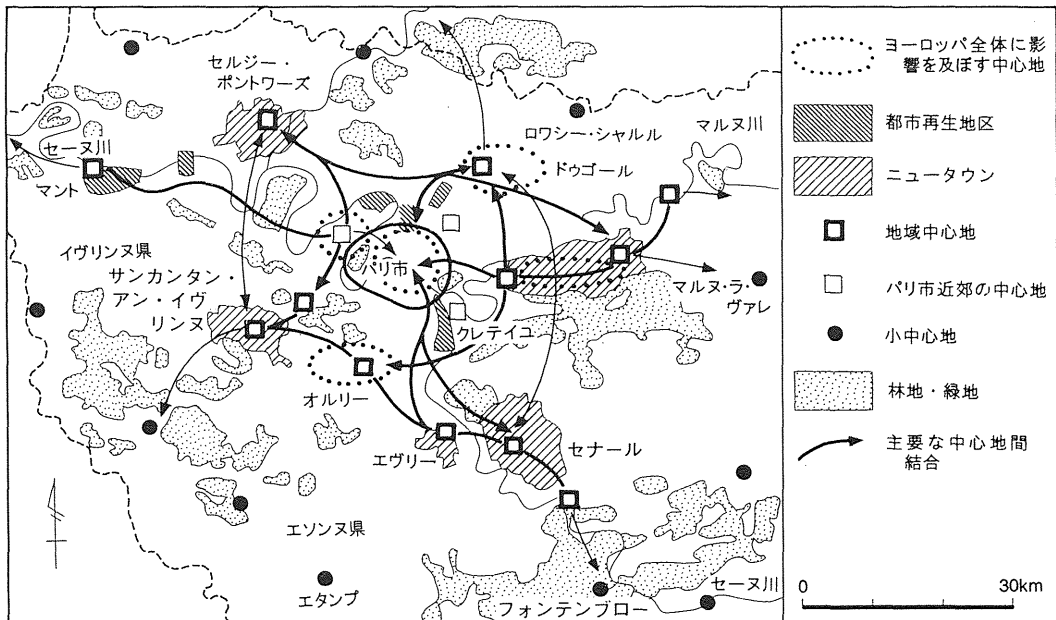
エヴリー・ニュータウンは、4つのコミューンにわたって展開している。一方、マルヌ・ラ・ヴァレ・ニュータウンは21という数多いコミューンに広がっている。計画面積についてみると、エヴリー・ニュータウンの計画面積は3,023ヘクタールであり、パリ大都市圏の中では最も狭い。この面積は、わが国では筑波研究学園都市（約2,700ヘクタール）や多摩ニュータウン（約3,020ヘクタール）とほぼ同規模である。フランスの9つのニュータウンの中で、最小のものは、リール・エスト（2,746ヘクタール）である。

土地売却時の最高平均土地価格は、パリに最も近接性の高いマルヌ・ラ・ヴァレ・ニュータウンであり、一方、最も低いのは、パリから遠隔地に立地し、建設工事が遅れている（ムラン・）セナール・

第1表 パリ大都市圏のニュータウンの土地基盤（1990年）

ニュータウン名	コミューン数 (1983年時点)	計画面積	土地取得面積	土地売却時の 平均土地価格
		ha	ha	フラン/m ²
エヴリー	4	3,023	2,038	10.09
セルジー・ポントワーズ	11	8,073	5,195	14.73
マルヌ・ラ・ヴァレ	21	15,000	5,941	20.55
			1,945 ¹⁾	
（ムラン・）セナール	10	11,876	4,842	9.14
サンカンタン・アン・イヴリンヌ	7	6,890	4,125	12.77
合 計	53	44,862	24,086	13.04

¹⁾ユーロディズニーランドの用地。



第1図 パリ大都市圏のニュータウンと将来計画（1992年）

（Projet de Schéma directeur, préfecture de la région d'Ile-de-France による）

ニュータウンである。フランスの9つのニュータウンの土地売却時の平均土地価格は、10.43フラン/m²であるため、パリ大都市圏のニュータウン敷地の価格は高水準にある。

第2表は、パリ大都市圏におけるニュータウンの建築状況を示している。1975年12月末日までに建築された全住宅数は、51,696であったが、15年後の1990年には、184,238戸に達し、その間に3.6倍に至った。とくに1976～80年の建築戸数が著しく多かった。1990年12月末日現在、エヴリー・ニュータウンには24,415の住宅が存在するが、最大でもセルジー・ポントワーズ・ニュータウンの45,723であり、それぞれには面積ほどの差異はない。

しかし、住宅の種類のうち、個人住宅率には大きな差がある。最も低い個人住宅率は、エヴリー・ニュータウンの23%であり、最高は（ムラン・）セナールの62%である。このような差は、ニュータウン相互の景観の差異としても現れている。他方、持ち家率はニュータウンによって大きく変わることはなく、平均値は60%である。フランスの全ニュータウンの平均値は、59%であって、同様に高率であり、この数値をみる限り、ニュータウン政策により、自己所有の住宅数の増大を意図したものと理解できよう。

第3表は、パリ大都市圏に5つのニュータウンの人口を比較したものである。1968年時点の人口は、ニュータウン建設前のものとほぼ推察してよいであろう。1968年には、178,066人であったものが、22年後の1990年には651,561の人口に達した。そのうち、マルヌ・ラ・ヴァレは、パリ大都市圏のうち、最も多い人口である12.3万を受け入れている。一方、人口数も最小のエヴリー・ニュータウンは、1968年から90年までに6.5万の人口を受け入れた。この表からみると、大都市パリ近郊に地域の成長

の極として、ニュータウンが建設されたことになる。しかし、いずれのニュータウンも、現時点では計画人口にほど遠く、ニュータウンの人口吸引力が弱いことを物語っている。

フランスにおける他の4つのニュータウンは、合計で195,485人（1990年）であり、人口10万を越えたのはリヴ・ドゥ・レタン・ドゥ・ベールのみである。ル・ヴォドゥライユは人口わずか11,373（1990年）しか有さない。フランスの9つのニュータウン人口、847,046のうち、パリ大都市圏の5つとエヴリー・ニュータウンの人口は、それぞれ、76.9%、8.7%を占めている。

第4表は、パリ大都市圏におけるニュータウンの工場・オフィス面積、雇用者・就業者数、そして、

第2表 パリ大都市圏におけるニュータウンの建築状況

ニュータウン名	住 宅 建 築 戸 数					住宅の類型 (%)	
	～1975年12月	1976～80年	1981～85年	1986～90年	1990年12月末日現在	個人住宅率	持ち家率
エヴリー	8,350	6,898	5,072	4,095	24,415	23	60
セルジー・ポントワース	13,126	12,086	10,788	9,723	45,723	46	59
マルヌ・ラ・ヴァレ	8,593	13,217	12,426	7,689	41,925	26	57
(ムラン・) セナール	5,433	8,354	8,484	6,730	29,001	62	63
サンカンタン・アン・イヴリヌ	16,194	12,850	6,688	7,442	43,174	37	61
合 計	51,696	53,405	43,458	35,679	184,238	39	60

資料：Fichier SIROCO jusqu'en 1980他

第3表 パリ大都市圏のニュータウンの人口

ニュータウン名	周辺コミューンを含む			周辺コミューンを含まない		
	コミューン数	人口(1968年)	人口(1990年)	コミューン数	人口(1968年)	人口(1990年)
エヴリー	5	9,430	75,836	4	8,258	73,343
セルジー・ポントワース	15	53,445	173,268	11	41,566	158,575
マルヌ・ラ・ヴァレ	21	85,546	203,980	26 ¹⁾	86,353	209,224
(ムラン・) セナール	18	65,709	160,087	10	17,195	81,725
サンカンタン・アン・イヴリヌ	11	41,415	191,108	7	24,694	128,694
合 計	70	255,545	804,279	58	178,066	651,561

¹⁾ユーロディズニール用地と5コミューンを加えてある。

資料：人口センサス他

第4表 パリ大都市圏におけるニュータウンの雇用者・就業者

ニュータウン名	工場地区面積	オフィス面積	雇 用 者		就業者 ¹⁾	雇用者／ 就業者率
			1968年	1990年		
	ha	ha	人	人	人	%
エヴリー	277	53.0	1,500	35,000	33,000	1.06
セルジー・ポントワース	437	59.4	15,000	72,000	72,000	1.00
マルヌ・ラ・ヴァレ	427	91.8	25,000	64,000	93,000	0.69
(ムラン・) セナール	258	5.7	2,500	21,000	35,000	0.60
サンカンタン・アン・イヴリヌ	473	81.3	7,000	52,000	59,000	0.88
合 計	1,872	291.2	51,000	244,000	292,000	0.83

¹⁾推計

資料：Secrétariat général du group central
des villes nouvelles

雇用者／就業者率を表出している。

工場面積に関しては、総計画面積の狭いエヴリー・ニュータウンの値が低いし、建設が遅れている（ムラン・）セナール・ニュータウンも258ヘクタールにしか達していない。それに対して、他の3つのニュータウンは400ヘクタールを越えている。地域の第三・四次産業化を測る尺度として、オフィス面積がある。この面積には、5つのニュータウンで大きな差異が生起している。最大のオフィス面積を誇るのは、マルヌ・ラ・ヴァレのニュータウンであり、パリ大都市圏内の5つのニュータウンに存在するオフィス面積の実に31.5%を占めている。マルヌ・ラ・ヴァレ・ニュータウンがパリ市に近接していることによるものであり、パリ近郊でのオフィス機能空間の東進を述べる学者が多いが、それを如実に示している。

反対に、（ムラン・）セナール・ニュータウンは、最も狭く、地域産業の高度化が低水準であることを示している。パリ大都市圏の5つのニュータウンにおけるオフィス面積は、全9つのニュータウンに占める割合が92.5%にも達し、この数値からも、パリへの経済機能の集中が将来にわたっても続行されるものと思われる。

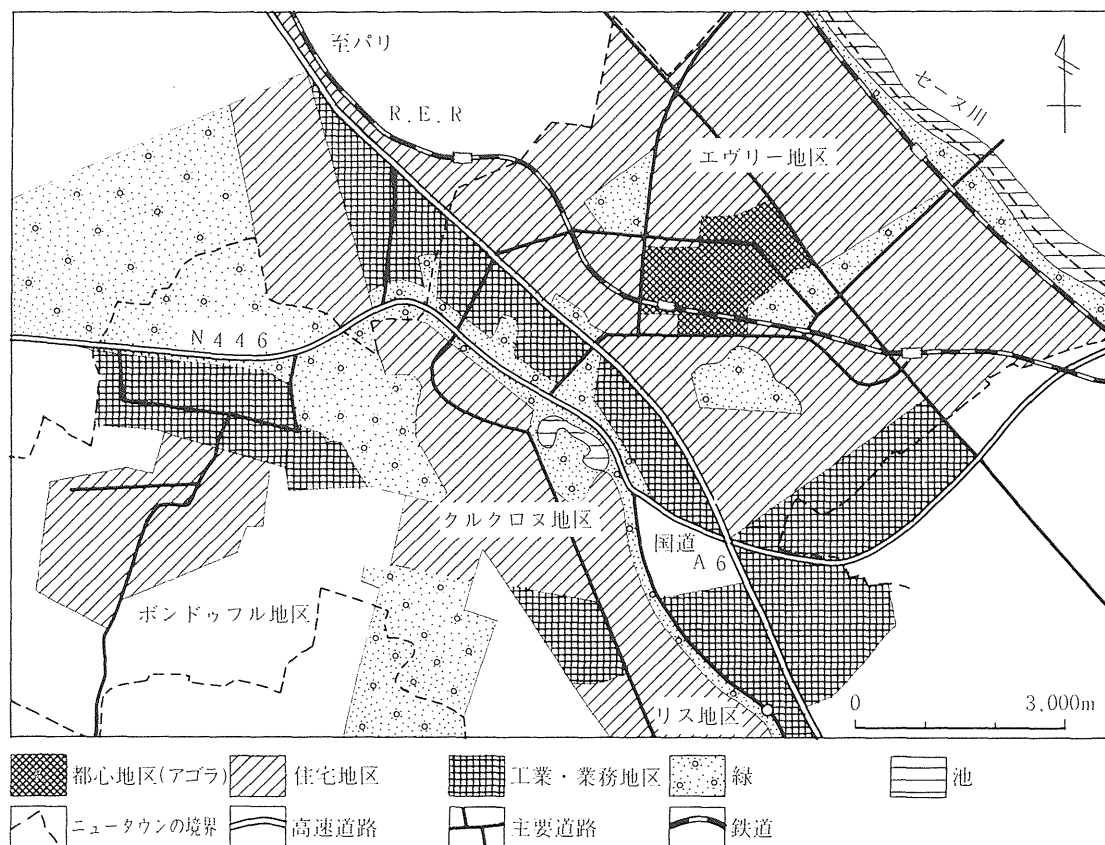
1968年時点での雇用者は、大部分が農業従事者と推定できる。一方、1990年の雇用者は、ニュータウン内に雇用の場が生じたことを提示している数値である。この数値から考察しても、パリ市近郊でニュータウンが雇用の場になっていることがわかる。さらに、雇用者／就業者率は、ニュータウンでの雇用の場をいかに提供させているかを測る指標となっている。この率が1を越えることは、ニュータウン内の就業者に比較して雇用者が上回り、両者が通勤をしないと仮定すれば、ニュータウンが雇用の核になっているという証左となる。

エヴリーとセルジー・ポントワーズ・ニュータウンのみが1を越えており、最低値を示す（ムラン・）セナール・ニュータウンに至っては0.6にしか達していない。上記のように、雇用という点からみても、パリ大都市圏のニュータウンは、現時点で成熟化していないといえよう。

Ⅲ エヴリー・ニュータウン計画の特性

Ⅲ－1 エヴリー・ニュータウンの誕生

エヴリー・ニュータウンは、パリ南南東約28キロメートルに位置し、ニュータウン東端をセーヌ川が流れている。パリ大都市圏内5つのうち、面積は最小である。1965年のパリ地方のマスタープランによって建設が決定した。引き続き1966年7月に、エヴリー・ニュータウン整備調査団（MEA）が創立し、翌年、現地に調査団事務所を開設し、本委員会が中心となって、現地調査を進め、1969年4月にエヴリー・ニュータウン整備公社（EPEVRY）が創立し、工事に着工した。本公社は、また、土地取得とすべての計画を実施するために公的な計画機関に移行した。1971年6月に、ニュータウンが立地するエソンヌ県の県庁が当地に移転した。同年、最初の住宅が完成し、「ピラミッド」と呼称される共同住宅には1975年に入居がはじまり、産業地区には工場の進出が開始した。他のパリ大都市圏ニュータウンのうち最も早い開発であった。1984年以降、本ニュータウンは4つのコミューンを結合させるコミューン連合組合（SAN）を組織した。



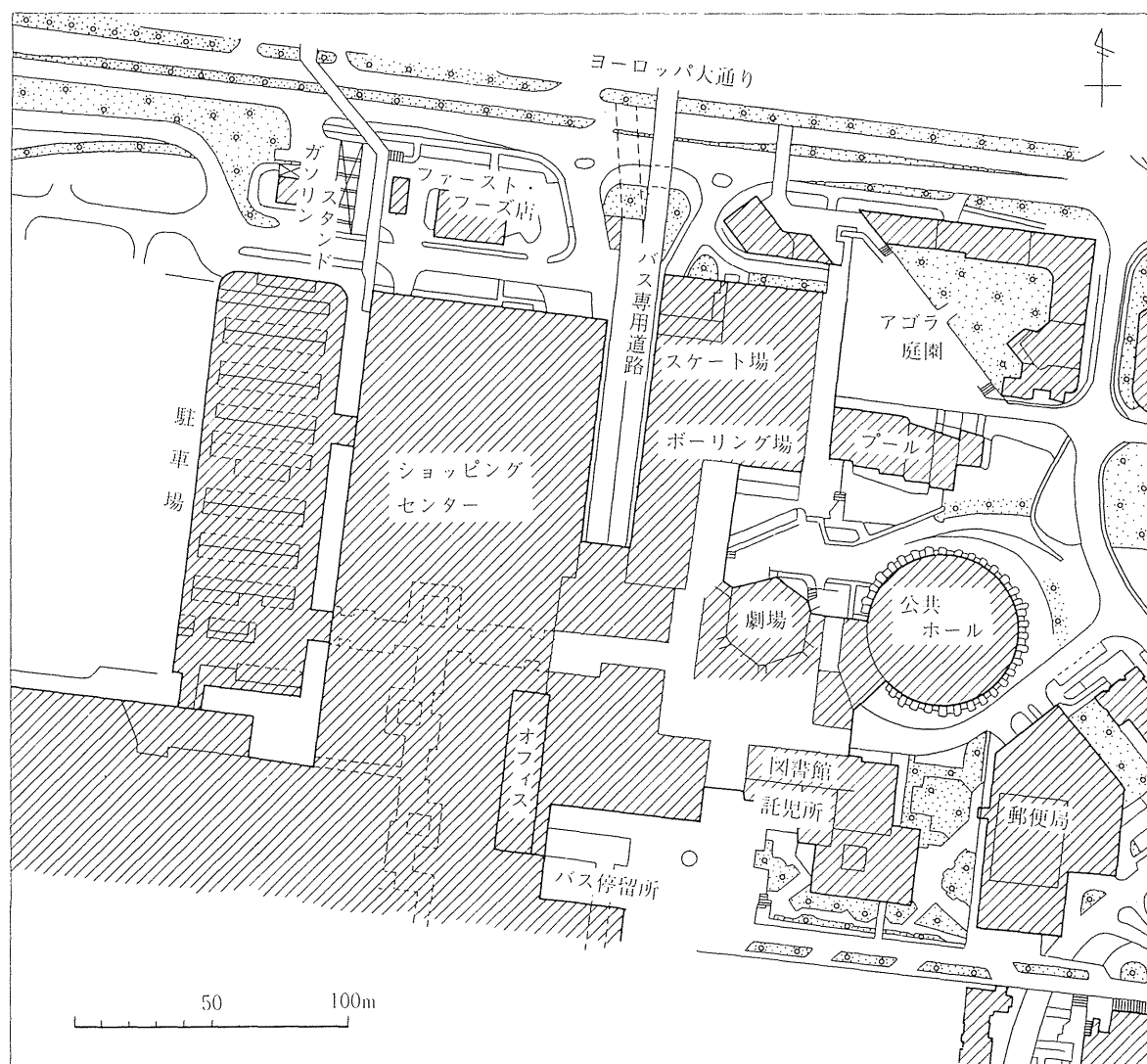
第2図 パリ南部エヴリー・ニュータウンの主要地区
(EPEVRYの資料に基づいて作成)

エヴリー・ニュータウンの都市は、他のニュータウンと同様に中規模都市が有する魅力を追求するものである。そのためには、都市機能を多様化し、その影響圏が広い範囲に及ぶことを意図して都心地区の建設が進められている。とくにエソンヌ県はイル・ドゥ・フランス地域の外周部に位置し、都市化が遅れていた。エソンヌ県の北部・中央部は、将来の地域発展の「介在機能」を保持させようとしている。そのため、既存の中心地を成長させるとともに、地域発展軸に沿って新たな都市域を受け入れなくてはならない。このため、エヴリー・ニュータウンはニュータウンのみの機能にとどまらず、パリ郊外の地域再編成核としての役割が当初から担うことを使命としていた。

エヴリーはニュータウンのとして成長が期待され、大学（1991年7月開校）とともに工業技術短期大学（IUT）を受け入れて、先端産業を誘致することが計画されている。その影響圏は周囲20数のコミューンに及ぶ。

Ⅲ－2 エヴリー・ニュータウンの主要機能

エヴリー・ニュータウンの機能を大別すると三つある。第一は行政・管理機能（県庁をはじめとす



第3図 パリ南郊エヴリー・ニュータウンの「アゴラ」地区（1994年）

（ Office du Tourisme de l'Agglomération d'Évry（1993）と現地調査（1994年7月）による ）

る公共機関の中核管理機能と私企業の中核管理機能）、第二にはサービス機能（ショッピングセンター・公共ホール、図書館等）そして情報交換の場としての機能を持ち備えたものである。したがって、今までパリにしか存在しなかった高次な機能を有する諸施設（大規模なショッピングセンター・劇場・大学等）を計画し、しかも、エソンヌ県の県庁を当地に移転させたのも、行政機能の集積を意図したものであった。

本ニュータウンの新しい都市計画の試みとしては、「アゴラ（Agora）」地区という新しい空間を創造することであった。ラテン民族が長い歴史の中で、高密度な都心を創造してきたことにより、この

ような建築理念が生じた。この基本的な考え方は、自然発生的な旧市街地中心部における空間のように、多数の人びとのために共有施設と諸活動を集積させることであった。すなわち、それは社会・文化そして余暇機能をもつ多様な施設を集めることであり、単なる商業的・行政的な施設の集積にとどまるものではない。そして、このアゴラはすべての広場と通路・バスによって直結し、それらの広場と道路は歩行者優先になっている。しかも、歩行者の流動の中心核であり、周囲の居住地区との連携は密であり、首都急行網（R.E.R.）・県庁・商業センターとも隣接している。120,000m²の空間を有するアゴラ地区では、遊歩道が諸施設を結びつけ、その沿道には喫茶店・レストランが並んでいる。アゴラを構成するものは公共ホール、大学、図書館、郵便局、スケート場・ボーリング場・プールなどの運動・余暇施設、劇場、アゴラ広場、託児所、そしてショッピングセンター等である。

Ⅲ－3 エヴリー・ニュータウンの生活空間

エヴリー・ニュータウンの空間を構成する基本的骨格は、X形状からなり、その基本型に従って、諸施設が配置されている。X形状の最大のもは長さ約4kmと1.5kmの2本の軸を組み合わせたものであり、その分流においても、X形状の基本型が採用され、200mと400mの長さの軸からなる小規模なものが存在する。このX形状の組み合わせによる都市計画においては、2本の軸が交差する交点にサービス機能を集中させるため、各地区からのそれらへの近接性は極めて高くなる。小さなXから大きなXの組み合わせにおいて、二つの軸の中間地帯には緑地空間が配列され、人口1人あたり25m²の緑地空間は他の都市に比較してきわめて高率である。それらの緑地空間は、規模に応じて用意されており、数多くの小さな公園と大きな面積を有する公園は、歩行者優先道路と自動車道によって結びついている。

生活空間の基本となる街区には、長さ800mと600mの2本の軸からなるX形状であり、当然その交点に中心的な機能が集まり、居住空間と商業施設をはじめとする諸機能が結合している。一つの街区のあらゆる地点に、徒歩で10分以内に達することができる。

ニュータウンにおいては、歩道と車道が分離されており、さらにニュータウン内を循環するバスの専用道路が敷設されているため、パリのものとは大きく異なっている。居住空間の構成をみると、アゴラ地区の北に隣接している集合住宅（「ピラミッド」と呼称されている）が典型的であるが、ピラミッド型になっている。個々のアパルトマンには、テラス（15m²から25m²）の空間が備わり、ゆとりのある居住空間として注目されている。

生活空間をより快適なものとするために、公共交通機関と自動車道の整備に大きな配慮がなされている。従来の都市は、とくに都心部においてモータリゼーションに対応できずに、自動車による近接性がきわめて低くなっている。しかし本ニュータウンは、モータリゼーションに対応した都市づくりを目途にして、自動車道・歩道の分離・バス専用道・広大なパーキング、そして立体交差によって、自動車による都心部への近接性を高める工夫がなされている。

Ⅲ-4 今後に希求する事項

エヴリー・ニュータウンは、建設当初から社会・経済的な機能のみならず、文化的な機能の創造が求められてきた。

現在、本ニュータウンで建設中であるのはイタリア人の設計によるエソンヌ大聖堂であり、商工会議所、エヴリー・タウンホール等である。特に大聖堂の建設は、キリスト教徒の多いフランスでは重要なことがらである。

フランスの各ニュータウンの課題は、自然環境といかに調和するかである。エヴリー・ニュータウンでは、東西軸方向に緑地を配置している。東側にはセーヌ川が流れ、水際線のオープンスペースが広がる。西に向って、いくつかの公園が配置され、クルクロヌ地区には、池を有したラック公園がある。さらに西側には、ガランヌ林地が広がり、競馬場、テニスコートをはじめとしたスポーツ施設が整備されつつある。ニュータウンの西端のボンデュフル地区にはゴルフ場が配置されている。ゴルフ場建設は、他のニュータウンでもみられることであり、ゴルフ場を備えることによって富裕層を吸引する意図がある。

エヴリー・ニュータウンのオープンスペースの配置からも理解できるように、エヴリー地区には集合住宅が主体となり、周辺部（とくに西方向）に向うに従って個人住宅が卓越する。

エヴリー・ニュータウンの将来に期待されている重要な機能の一つは、「先端技術の主導的中核」、すなわちテクノポリスの形成である。すでに、アゴラ地区と県庁に隣接して、エヴリー・ヴァルデソンヌ大学が立地し、工業技術短期大学（IUT）の建設も予定されている。ニュータウン内には流通団地、中規模企業団地、ヘリポートなどが整備されつつあり、工業業種は先端産業から食料品・印刷業まで巾をもたせて多業種化を意図しながら誘致策が進められている。パリ大都市圏内には、サンカンタン・アン・イヴリンヌから発して、オルリー・ランジス、サクレー・マシーに連なる「ハイテクロード構想」があり、これはエヴリー・ニュータウンに近接するセナール・ニュータウンにまで伸びる（第1図参照）。この構想を助長するものとして、フランシリアン（「イル・ドゥ・フランス」の形容詞）道路（N104）の建設である。勿論、既存の高速道路（A6）も重要な基盤を提供するものである。したがって、今後、教育機関・研究機関そして事業所の集積が進むであろうが、現在のところ本ニュータウンの土地価格は安価であり、上述の構想には有利とする向きもある。

Ⅳ エヴリー・ニュータウンの居住者特性

Ⅳ-Ⅰ 人口特性

エヴリー・ニュータウンは、前述の通り、4つのコミューンに広がり、それらは地区と本稿では呼称する。1990年の人口センサスでは、本ニュータウンの総人口は、73,392であり、そのうち5分の3の人口はエヴリー地区に集まっている。一方、リス地区のそれは、本ニュータウンの10分の1にも満たない。この人口分布からみても、中心地区に人口密度を高く周辺部へ向うに応じてそれが低下するように配置されていることが確認できる。

エヴリー・ニュータウンは、パリ大都市圏内の5つのものの中では、最小規模であるが、1962年か

ら1990年までの人口増加率は12倍を越えて、最高値を示した。また、1982～90年までの年間平均人口増加率は、5.7%と高率であり、この増加率を上まわったのは（ムラン・）セナール・ニュータウンの7.0%のみであった。

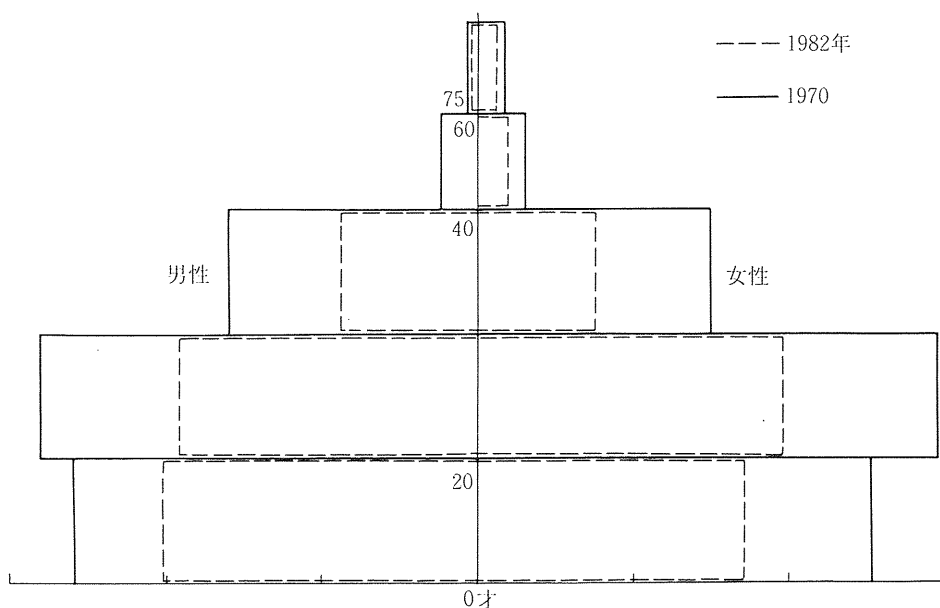
人口が急速に増える状況下で、ボンドウフル地区は人口減少を経験した。第5表が示すように、ニュータウンの人口増は社会増に基づいていることが理解できる。そのため上述のボンドウフル地区の人口減も自然減によるものでなく、社会減によるものであった。エヴリー地区に次ぐ人口集積地区であるクルクロンヌ地区は、1982～90年までに3.8倍も人口増加を示したが、その内訳は社会増によるものである。ニュータウンの人口増は、当然のこととして、社会増の果たす役割が就中大きい。

世界におけるニュータウンでは、建設当初においては、居住者は一般的に若年層が主体である。第4図が示す通り、エヴリー・ニュータウンも例外ではない。1990年時点で、エヴリー・ニュータウンの全人口の34.9%は、20才以下である。この高率は、エソンヌ県のそれ（28.6%）やイル・ドゥ・フ

第5表 パリ南郊エヴリー・ニュータウンの地区別人口変化

地区名	人 口		人 口 増加数	自然増			社会増	人口増加率 (1982/92年)	年増加率	出生率	死亡率	人口年変動数	
	1982年	1990年		出生数	死亡数	自然増						自然増加率	社会増加率
エヴリー	29,491	45,542	16,051	7,478	1,050	6,428	9,623	54.4	5.6	26.0	3.6	2.2	3.3
クルクロンヌ	5,093	13,257	8,164	1,495	150	1,345	6,819	160.3	12.7	23.2	2.3	2.1	10.6
リス	4,347	6,870	2,523	630	135	495	2,028	58.0	5.9	14.7	3.1	1.2	4.7
ボンドウフル	8,119	7,723	-396	679	120	559	-955	-4.9	-0.6	10.7	1.9	0.9	-1.5
合 計	47,050	73,392	26,342	10,282	1,455	8,827	17,515	56.0	5.7	22.3	3.2	1.9	3.8

(Les Cahiers de l'Observatoire, n°1, 1992による)



第4図 パリ南部エヴリー・ニュータウンの人工ピラミッド
(Les Cahiers de l'Observatoire, N°1, 1992による)

ランスのそれ（26.1％）に比較して著しい差を示している。

また、20～39才までの青壮年層は、1990年時点で約40％を占めるが、この値も他の4つのパリ大都市圏ニュータウンのそれよりも上まわる。

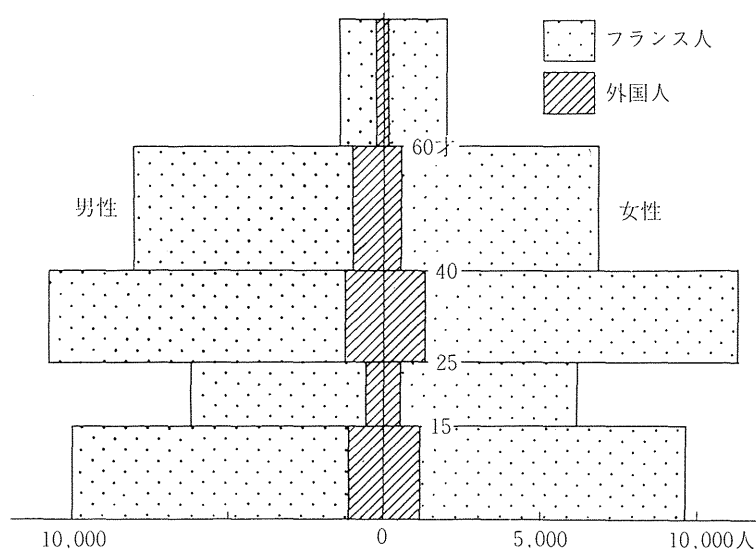
「第四世代」といわれる高齢者をみると、75才の全人口に占める割合（1990年）は、エヴリー・ニュータウンではわずかに1.4％であり、パリ大都市圏の2.2％、イル・ドゥ・フランスの5.7％をはるかに下まわる。とくにクルクロヌヌ地区（0.6％）とボンドウフル地区（0.8％）では、その値は著しく低い。以上のように、エヴリー・ニュータウンの居住人口は、若年層の卓越性に特性を有している。

世帯規模をみると、エヴリー・ニュータウンの平均世帯数は、1975年に3.3人であったが、1990年には3.0人に低下し、核家族化が顕著である。大世帯（6人以上）は全体のわずか5％のみしか占めないが、この値はマルヌ・ラ・ヴァレ・ニュータウンに次いで、パリ大都市圏内のニュータウンでは低率である。

単身の割合も、エヴリー・ニュータウンでは高率を示している。パリ大都市圏内の5つのニュータウンの平均値は16.6％であるが、エヴリー・ニュータウンは18.4％に達していることも書き加えておく。

フランスには、多数の外国人が居住することは周知の事実である。フランス総人口約5,660万に対して約360万人の外国人が居住し、その割合は6％強に達する。エヴリー・ニュータウンにおいても外国人の割合が急速に増加しつつある。1982年には総人口に占める外国人率は5.4％（2.4％がEC諸国の国籍、3％がEC諸国以外の国籍）であったが、1990年には10.7％（2.1％がEC諸国の国籍、8.6％がEC諸国以外の国籍）に達した。上記でわかるように、外国人のうちEC諸国以外の国籍（とくにアフリカ人）を有するものの人口が急速に増大している。

第5図が示すように、外国人の多い年齢層は、1990年現在、とくに0～14才、25～39才、そして40



第5図 パリ南郊エヴリー・ニュータウンの年齢、フランス人・外国人別の人口ピラミッド
(Les Cahiers de l'Observatoire, N°1, 1992による)

～59才である。それぞれ、11.7、12.5、10.5%であり、年齢層では25～39才が最高値を示し、外国からの出稼労働者がニュータウンに流入している事実を読みとることができる。しかも、EC諸国外からのとくにアフリカからの流入者が目立つ。

Ⅳ－2 就業人口の特性

エヴリー・ニュータウンの就業人口は、エソンヌ県全体の7%を占める。同ニュータウン内の就業人口の60%以上がエヴリー地区に集中している。

就業人口の職業別・年齢別比率に関しては第6表が示している。この表が表現しているように、事務労働者の割合が高い。この割合は、(ムラン・)セナール・ニュータウンに次ぐものである。エヴリー・ニュータウンのうち、とくに15～24才の事務労働者の割合が高い。そのためエヴリー・ニュータウンでは、若年層の事務系労働者が主体といえる。

一方、高級管理者の割合はあまり高くない。当然、その割合は年齢に応じて高率になる傾向が認められる。またニュータウンであるため、当然、自営業者の割合は低い。今後、ニュータウンの成長とともにこの割合は増加すると思われる。

第7表が示すように、ニュータウン内で就業比率が異なる。肉体労働者には、地区的差異がなく、

第6表 パリ南郊エヴリー・ニュータウンの年齢別・職業別比率(1990年、%)

職 業	全 体	年 齢 階 級				
		15～24歳	25～39	40～49	50～59	60以上
熟練・未熟練労働者	7.0	14.4	6.3	5.5	8.3	5.1
肉体労働者	13.0	16.3	12.9	11.1	15.6	8.3
事務労働者	29.2	45.7	31.0	23.0	21.0	28.3
技術者	17.2	12.0	17.5	18.4	17.2	11.4
中級管理者	9.7	4.3	10.8	10.4	7.7	7.5
高級管理者	18.7	2.8	16.9	25.5	23.5	26.8
自営業・その他	5.3	4.5	4.6	6.1	6.7	12.6

回答者を得た28,733人に関するもののみの資料。

(Les Cahiers de l'Observatoire, 1992による)

第7表 パリ南郊エヴリー・ニュータウンの地区別とエソンヌ県、イル・ドゥ・フランス地域における職業比率の比較(1990年、%)

地 区	肉体労働者	事務労働者	高級管理者
	%	%	%
エヴリー地区	13.24	30.25	17.97
クルクロンヌ地区	12.43	28.13	21.41
リス地区	13.46	27.07	16.36
ボンドゥフル地区	11.95	25.84	19.85
エヴリー・ニュータウン全体	12.96	29.16	18.66
エソンヌ県	13.70	25.50	20.10
イル・ドゥ・フランス地域	12.60	24.90	22.30

いずれの地区もエソンヌ県やイル・ドゥ・フランス地域の平均値と近似している。そして、事務労働者に関しては、いずれの地区ともエソンヌ県とイル・ドゥ・フランス地域を上まわっている。ニュータウン内では、エヴリー地区の値が高いのが目立つ。就業構造を地域的に検討するために、高級管理者の割合を第7表中に呈示した。前述したように、エヴリー・ニュータウン全体の値が、エソンヌ県とイル・ドゥ・フランス地域の平均値を下まわる。このことから、ニュータウンが富裕層を十分に吸引しなかったともいえよう。そして、この値は地区間で大きな差異が生じている。最も低い値を示すのはリス地区であり、反対にクルクロヌ地区は高率であり、他の指標を考慮すると、ニュータウン内の地域分化が進行しつつあると推察できる。

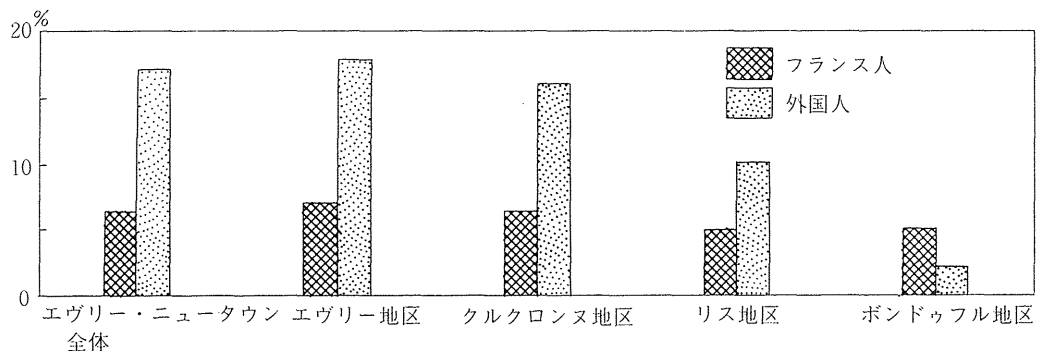
ニュータウンであるため、当然退職者率は低いが、念のためその値を示すと、エヴリー・ニュータウン全人口の3.8%にすぎず、エソンヌ県全人口の10.9%に比較するとこの事実は明瞭である。

学歴に関する統計が、国立統計経済研究所（INSEE）から発表されているが、高学歴者（大学・大学院・高等大学校等の卒業者）の全人口に占める割合（1990年）は、エヴリー・ニュータウンで6.7%であり、この値はエソンヌ県のそれと同率であるが、イル・ドゥ・フランス地域の9.6%に及んでいない。

失業者数の多いことは、フランスにおいてとくに1970年以降の社会問題となっている。1992年3月現在、フランス全土で失業率が10.1%に達し、男性は7.9%、女性は12.8%という数値が示すごとく、男女差も認められる⁴⁾。

フランス全体の傾向を背景にして、エヴリー・ニュータウンの失業率は1982年の6.9%から1990年には7.5%に達している。この間、エソンヌ県の失業率も0.6%増えている。エヴリー・ニュータウン内では、エヴリー地区が8.1%と最高値であり、ボンデュフル地区が最低値の5.0%である。フランス全体と同じように、女性の失業率がエヴリー・ニュータウンでは10.5%に達する高率を示している。エヴリー・ニュータウンにおける労働者の35.8%に達する人びとが、過去に3か月以上から1年間にわたる失業期間を経験している。

第6図が明瞭に示すように、エヴリー・ニュータウン全体では、外国人の失業率が16.9%に達する。



第6図 パリ南郊エヴリー・ニュータウンの地区別失業者率（1990年）
（Recensement général de la population より作成）

とくに EC 諸国以外の外国人失業率は20.0%の高い率を示している。外国人の失業者率の地区的差異も顕著である。エヴリー地区の外国人失業者率が17.7%に至り、外国人の少ないボンドゥフル地区では、その値は4.4%である。したがって、フランス全体の失業問題もニュータウンにおいても深刻であり、就中、女性と外国人に失業者率が高率であることに特色がある。

Ⅳ－3 通勤行動の特性

フランスのニュータウン建設の目標には、勿論、職住近接を計画することが意図されていた。ヨーロッパ人は、古くから職住近接の習慣を有していた。たとえば、パリ市の場合、アメリカ合衆国や日本の大都市に遅れはしたものの、人口の空洞化現象が進行してきた。そのため、居住地と就業地が分離するようになり、その通勤距離も年々伸びる傾向にある。この減少に対処するためにも、上記のような職住近接がニュータウン政策に採り入れられた。

エヴリー・ニュータウンの就業者数は、45,849人であり、パリ大都市圏内の5つのニュータウンの16.5%に達する。エヴリー・ニュータウンの人口が上記5ニュータウンの11.2%しか占めていないため、就業者数の集積は他のニュータウンより進んでいる。その就業者数の4分の3は、エヴリー地区に集中している。エヴリー・ニュータウンは、イル・ドゥ・フランス地域に位置する外周県の中では、ヴェルサイユ、ロワシー・アン・フランスに次いで第三の雇用集積核を形成している。5つのニュータウン内で、就業者を上まわる雇用者を有するのは、エヴリーとセルジー・ポントワーズのみである。雇用者／就業者比がニュータウン内で最高値（1.41）を示すのはエヴリー地区であり、他方、最低値（0.49）はクルクロヌヌ地区である。

第8表は、エヴリー・ニュータウンの就業者がいかなる地区で労働しているかの様相を表出している。ニュータウン全体では、就業者の29.4%のみしかニュータウンに働くことができず、エソンヌ県内まで範囲を広げると66.3%に達する。すなわち、33.7%の就業者はニュータウンの位置していない他県へ流出している。

エヴリー・ニュータウンの中で、就業者の雇用状況が異なる。エヴリー地区は同ニュータウン内で

第8表 パリ南郊エヴリー・ニュータウンの職住近接状況

地 区	就 業 地					
	エヴリー・ニュータウン内		エソンヌ県 ¹⁾		その他の県	
	1982年	1990年	1982年	1990年	1982年	1990年
エヴリー	% 38.2	% 37.2	% 29.1	% 29.4	% 32.5	% 33.4
クルクロヌヌ	12.6	13.8	50.0	50.2	37.5	36.0
リス	13.7	20.2	54.5	50.4	31.9	29.4
ボンドゥフル	15.2	17.0	44.5	47.5	40.3	35.5
エヴリー・ニュータウン全体	29.4	29.2	36.2	37.1	34.4	33.7

¹⁾エヴリー・ニュータウンが位置する県。

(Les Cahiers de l'Observatoire, 1990)

就業する割合が、1982年と1990年両年ともに30%をはるかに越える。それに対して3地区の就業者に関しては、ニュータウン内で就業する割合が低い。ただし、当該3地区とも1982年と1990年を比較すると、ニュータウン内就業率が高まりつつあり、とくにリス地区でその傾向が見い出せる。

第7図は、エヴリー・ニュータウン居住者の就業地と同ニュータウンに就業する労働者の分布の状況を表出している。

まず同ニュータウン居住者の就業地先は、エソンヌ県内に9,144人、次いでパリ市(5,661人)、そしてパリ近郊内帯のヴァル・ドゥ・マルヌ県(3,073人)と続く。その状況をみる限り、ニュータウン内に就業を見い出さない者は、エヴリー・ニュータウンとパリ市を結合する軸上に通勤流動している。同ニュータウンに居住し他地域で就業する者のうち、パリ市に通勤する者は、16.0%になることを加筆しておく。

第7図bは、エヴリー・ニュータウンで就業する者の居住地の分布を示している。まず第一に、ニュータウンが位置するエソンヌ県に居住する者が20,514人に達し、ニュータウン居住者を上まわることに注目したい。この数値は、エヴリー・ニュータウンがエソンヌ県の雇用核として成長している証左でもある。そして、隣接するセヌ・エ・マルヌ県からの通勤者が3,513人いることも注視したい。ちなみにパリからの通勤者は1,819人存在し、全流入者の4.0%にすぎない。第7図a、bを比較して、エヴリー・ニュータウンを中心とした通勤圏は、流入通勤圏に比較して流出通勤圏の方が広大である。

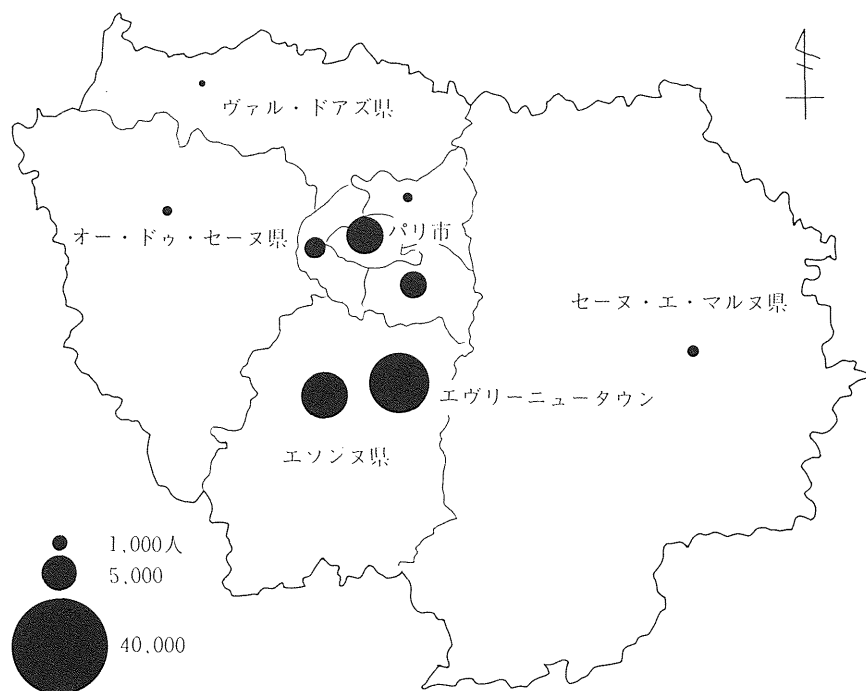
V エヴリー・ニュータウンの課題

以上、エヴリー・ニュータウンを中心として考察した結果、主要な課題は以下の6つにまとめることができる。

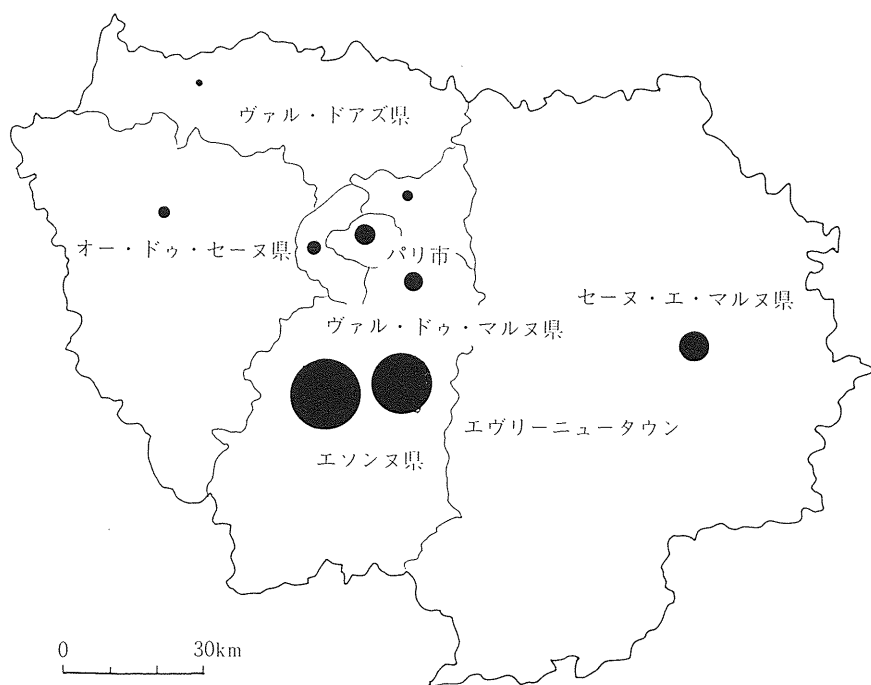
1. フランスにおけるニュータウンの計画人口は、当初人口70~100万から出発し、その後歴史を経るに依じて縮小し、最終的には10~30万となった。しかし、1990年現在、パリ大都市圏内では、マルヌ・ラ・ヴァレ・ニュータウンのみが20万を越える人口を擁し、エヴリー・ニュータウンは7.3万に留まっている。

パリ大都市圏内に位置する5つのニュータウンの総人口は約65万であるため、イル・ドゥ・フランス地域全人口(1,065万)の6%強を受け入れているにすぎない。ニュータウンは、現在、建設中であるが、首都圏の人口増の受け皿として大きな期待がかかったが、その割には、いまだ十分に機能しているとは言いがたい。ニュータウン建設期がフランスの経済不況期に遭遇したことも重要視せねばならないが、フランス人は、元来、歴史の古い建造物を好む傾向があり、それに対してニュータウン建設にはさまざまな試みが盛り込められたが、その魅力は多くの人びとを吸引するには至っていない。

2. 雇用の場としてのニュータウンを考えた場合、雇用者/就業者率が1.0以上に達したのは、パリ大都市圏内の5つのニュータウンのうちエヴリーとセルジー・ポントワーズの2つのニュータウンのみである。このことは当然、他の3つのニュータウンではかなりの労働者がニュータウン以外に職を求めていることになる。



a. エヴリーニュータウンに居住する者の就業地の分布



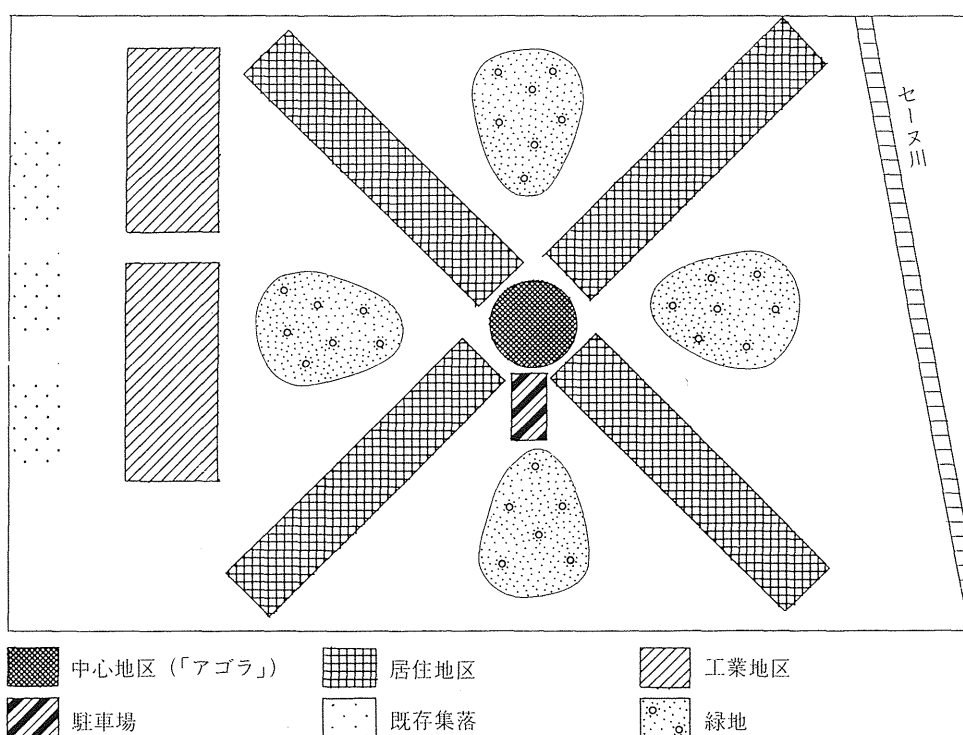
b. エヴリーニュータウンに就業する労働者の分布

第7図 パリ南郊エヴリー・ニュータウンに就業する労働者と居住者の就業地先(1990年)
 (Secrétariat général du Group central des villes nouvelles (1973): Migrations
 atternantes en ville nouvelle. による)

就業構造から分析する場合、高級管理者を富裕層とみなしてみると、その値が低率であり、一方、事務職系の割合が高く、ニュータウンは中産階級層を受け入れているとも考察できる。

いずれにして、雇用構造の成熟化は十分に進展してはならず、その意味でもニュータウンの自立化は今後に残された課題である。

3. エヴリー・ニュータウンの場合、都市計画の原理の一つとして、Xという形状軸の組み合わせがあった。当然、それには大小存在している。最大のX軸の交点には、「アゴラ（都心地区）」が位置し、その中間地帯には緑地を配置してある。また、住宅・産業地区にもスケールの異なるX軸型配置が導入されているが、モータリゼーションを前提としているために、ニュータウン全体の空間が低密度であり、就中かつてパリ市に居住していた住民に対して、この新しい空間に不満が生じている。
4. ニュータウン内を地区別に見ると、外国人率、失業率、就業構造などから分析して差異が生じている。低家賃の社会共同住宅が卓越するエヴリー地区に外国人（とくにアフリカ人）率、失業率が高く、高級管理者率が低いのが顕著である。一方、周辺部に向うに応じて、外国人率・失業率が低くなり、高級管理者率が高まり、ニュータウン内にもパリにみられるセグリゲーションが生起している。



第8図 パリ南郊エヴリー・ニュータウンの概念図

5. ニュータウンは、今後も、環境を整備しなくてはならず、不足している生活環境の充実もはからねばならない。ニュータウンを大都市圏内の余暇基地と考えれば、自然環境の保護、ゴルフ場をはじめとするスポーツ施設の整備などである。とくにゴルフ場の造成は富裕層を吸引するものとして、各ニュータウンの課題になっている。
6. P. メルランが述べるごとくに、「ニュータウンはいつしかオールドタウンになる」ため、各ニュータウンの将来的展望の下に、新しい都市機能をつねに付加しなくてはならない。

Ⅵ エヴリー・ニュータウンの将来像 ―むすびにかえて―

現在、パリ大都市圏内の5つのニュータウンを相互に結合するフランシリアン（「イル・ドゥ・フランス地域」の形容詞）道路が建設中である。この道路が完成すれば、ニュータウン相互の近接性は高まるため、ニュータウン相互の競合がより一層厳しくなり、ニュータウン個々の個性化が求められることであろう。

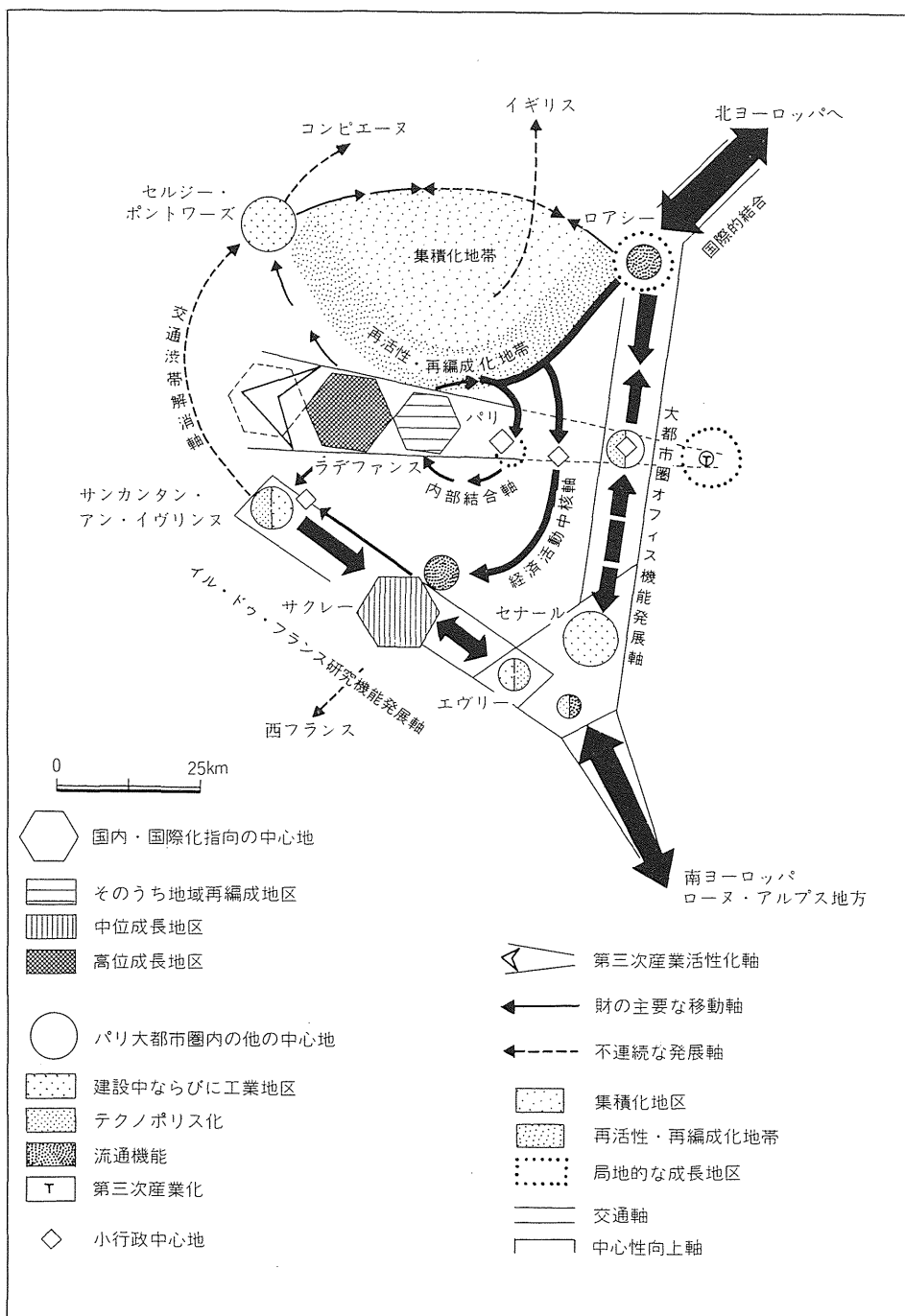
エヴリー・ニュータウンに限ってみても、1995年には首都圏急行網（R.E.R.）のD線が開通する予定であり、パリ市都心部のシャトレ駅まで直結される。したがって、パリとの近接性は一層高まる。

パリ大都市圏のニュータウンは、現時点で雇用状況からみても十分な自立性を有していない。そのためには、将来にわたって大都市パリの郊外における地域再編成核としてニュータウンを位置づけて、自立性を高めなくてはならない。

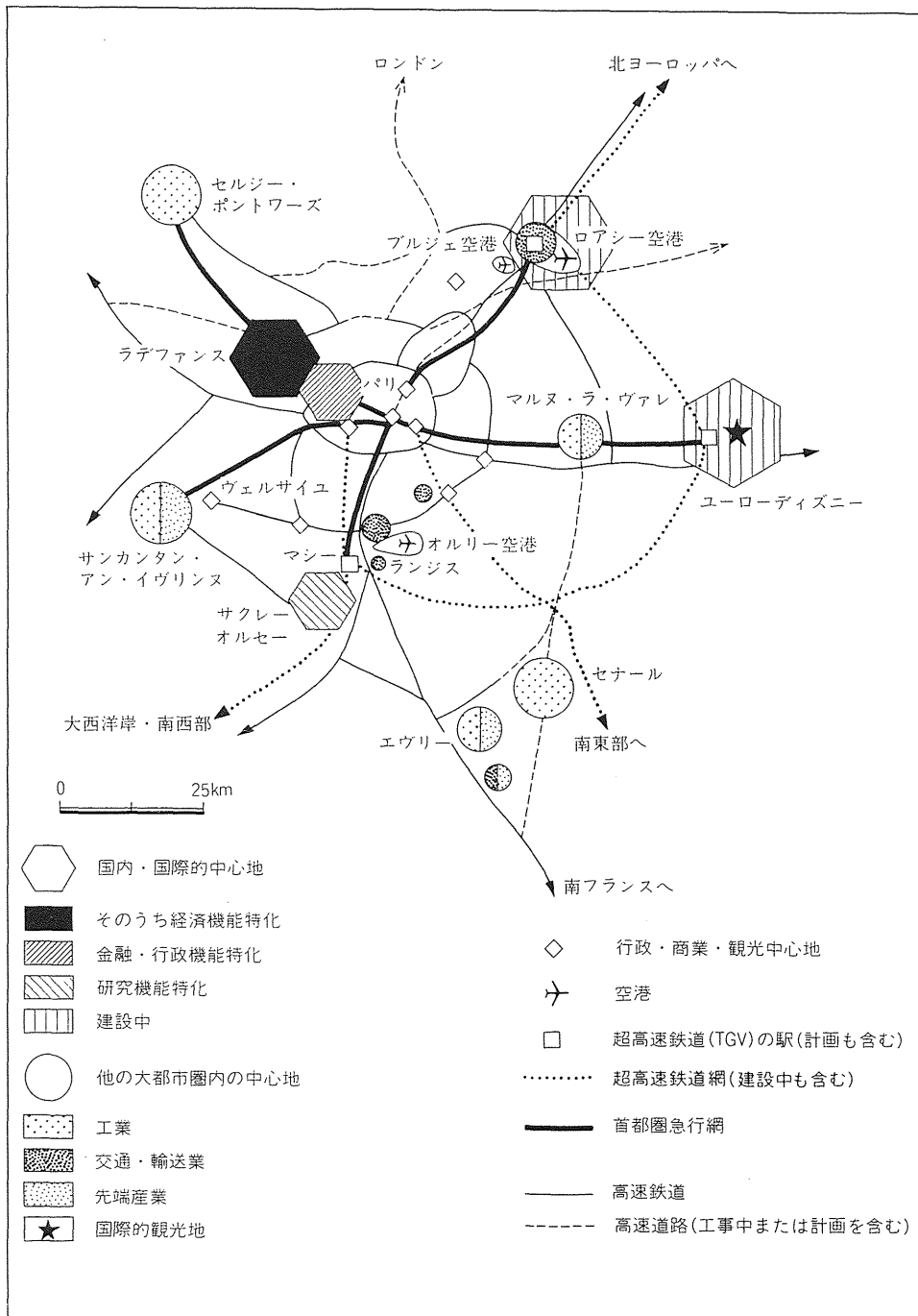
V. ライエがパリ大都市圏の発展軸（第9図）と国際都市パリの将来計画（第10図）を発表している。この二葉の図は、パリ大都市圏は勿論のこと、EUの時代下でのヨーロッパをも視座に入れた将来像を表出している。パリ大都市圏の多核化が過大評価しているように思われるが、これらの将来像はさまざまな知見を与えてくれる。

両図とも、エヴリー・ニュータウンは先端産業と他産業の集積に期待がかけられている。すなわち、パリ大都市圏の郊外部において、テクノポリス化が進められることが望まれている。とくにサンカンタン・アン・イヴリンヌ・ニュータウンに発する「イル・ドゥ・フランス」研究機能発展軸は、エソンヌ県のサクレーを通して、エヴリー・ニュータウンにまで達している。なお、この研究機能発展軸は西フランスに至る「支流」を有し、副都心ラデファンスとサンカンタン・アン・イヴリンヌとの結合関係を有している。

一方、ロアジー（国際空港とその周辺の産業・オフィス機能の集積地）から南下する「大都市圏オフィス機能発展軸」はマルヌ・ラ・ヴァレ・ニュータウンを経て、エヴリー・ニュータウンと接するセナール・ニュータウンに至る。そのため、エヴリー・ニュータウンはパリ大都市圏の「研究機能発展軸」と「パリ大都市圏オフィス機能発展軸」の接合する要衝地に位置する。このテクノポリス化とオフィス機能の集積の高度化が進展すれば、その発展軸はロヌ・アルプス地方を経て南ヨーロッパにまで伸長することになるであろう。



第9図 パリ大都市圏の発展軸 (V. Lahaye, 1993年による)



第10図 国際都市パリの将来計画 (V. Lahaye, 1993年による)

謝 辞

本稿は、文部省・科学研究費「国際学術研究」による研究課題「パリ大都市圏の構造変容に関する地理学的研究」の第2年度(平成6年度)の成果の一部である。外務省文化交流部・在フランス日本国大使館、D. Lobry・J. Barilari 両氏をはじめとするエソンヌ県の方々、エヴリー・ニュータウン整備公社所長 J. M. Guittard と B. Depresle 両氏他の人々、そして茨城県国際交流課の方々にもいろいろお世話になった。同行した桜井明久・手塚 章・村山祐司・菊地俊夫各氏に感謝するとともに、現地の研究分担者である J. R. Pitte (パリ・ソルボンヌ大学地理学研究所・教授) と J. Robert (パリ・ソルボンヌ大学地理学研究所・助教授) 両氏に謝辞を述べたい。製図は宮坂和人・小崎四郎両氏へ、また資料整理等は筑波大学大学院の鹿嶋 洋・堤 純・松井圭介の三君に依頼した。以上、記してお礼を申し上げます。

注

- 1) 高阪宏行 (1980): イギリスにおける都市建設—田園都市、ニュータウン、ニューシティー。人文地理学研究, **IV**, 167~195. など.
- 2) 手塚 章 (1981): 第二次大戦後におけるパリの拡大と都市計画。人文地理学研究, **V**, 51~69.
高橋伸夫 (1987): 『改訂版 フランスの都市』
- 二宮書店, 147p. など.
- 3) ムラン・セナール・ニュータウンは, 1994年にセナール・ニュータウンという名称に変更した.
- 4) INSEE (1993): *Tableau de l'Economie Française*, 182p. による.

参 考 文 献

- 手塚 章 (1981): 第二次大戦後におけるパリの拡大と都市計画。人文地理学研究, **V**, 51~69.
- 高橋伸夫 (1987): 『改訂版 フランスの都市』二宮書店, 147p.
- 高橋伸夫 (1994): 変わるパリ大都市圏。地理月報417号, 1~3.
- 高橋伸夫 (1994): フランスにおけるイル・ドゥ・フランス地域 (Ile-de-France) の地域特性と将来計画。人文地理学研究, **XVIII**, 207~242.
- Bastie, J. (1984): *Géographie du Grand Paris*. Masson, 208p.
- Merlin, P. (1991): *Les villes nouvelles en France*. P.U.F., 127p.
- Pinchemel, Ph. (1979): *La région parisienne*. P.U.F., 127p.
- Pitte, J. R. (éd.): *Paris, histoire d'une ville*. Hachette, 191p.
- Région d'Ile de France (1988): *Rapport sur les villes nouvelles de la région d'Ile de France*. 198p.
- Robert, J. (1994): *L'Ile-de-France*. P.U.F., 126p.
- Roullier, J. E. (éd.) (1989): *Villes nouvelles en France*. Economica, 360p.
- Steinberg, J. (1981): *Les villes nouvelles d'Ile-de-France*. Masson, 786p.
- Steinberg, J. (1991): *Les villes nouvelles sont-elles des technopoles? Le cas d'Evry et de Marne-la-Vallée*. Beaujeu-Garnier, J. et al. (éd.): *La grande ville: enjeu du XXI^e siècle*. P.U.F., 435~448.
- Tuppen, J.N. (1979): New Towns in the Paris Region. *Town Planning Review*, **50**, 55~70.
- Tuppen, J.N. (1983): The development of French New Towns: an Assessment of Progress. *Urban Studies*, **20**, 11~30.
- Winchester, H.P.M. (1993): *Contemporary France*. Longman, 277p.

L'état actuel et le futur des villes nouvelles en Ile-de-France, le cas d'Évry

Nobuo TAKAHASHI

Le rapport est le résultat de notre recherche menée pendant la deuxième année. Notre recherche coopérative entre chercheurs japonais et français (Professeurs Jean-Robert PITTE et Jean Robert) porte sur la transformation de la structure spatiale dans la région parisienne. Dans chacune des trois zones, c'est-à-dire la zone rurale de la grande banlieue parisienne, la zone urbanisée de la banlieue parisienne et la ville de Paris, nous mènerons des enquêtes sur le terrain afin d'escaminer leurs caractéristiques géographiques et leurs rôles fonctionnels. Notre visée première est de construire un nouveau modèle spatial sur la restructuration urbaine récente dans les régions métropolitaines par le biais d'études comparatives avec la région métropolitaine de Tokyo.

Titre: Étude géographique sur la restructuration spatiale de la région parisienne recherchée subventionnée par le Ministère de l'Éducation Nationale du Japon (Monbusho) pendant trois ans.

Cet article, qui faisant des enquêtes en 1994 dans la ville nouvelle d'Évry, préfecture du département de l'ESSONNE, a analysé sa structure régional par le caractère propre des habitants et la structure de l'emploi, l'utilisation du sol, la relation entre cette ville nouvelle et des régions extérieures, son problème à envisager dans l'immédiat et son futur.



写真1 エヴリー・ニュータウンにあるエソンヌ県の
県庁舎
(1993年, 筆者撮影, 以下写真40まで同じ).

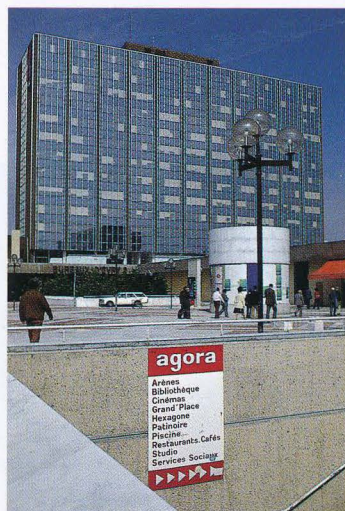


写真2 エヴリー・ニュータウンの中心部「アゴラ」
(1984年).



写真3 エヴリー・ニュータウンの中心部「アゴラ」
(1994年, 以下写真40まで同じ).

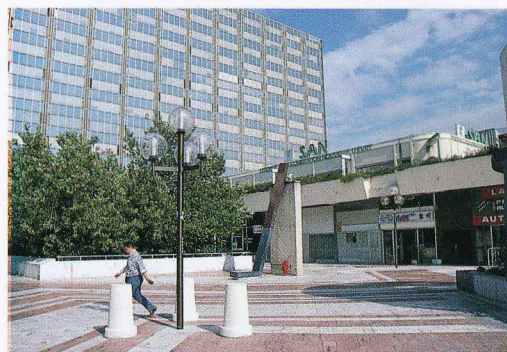


写真4 エヴリー・ニュータウンの中心部「アゴラ」.



写真5 エヴリー・ニュータウンのオフィス地区。



写真6 エヴリー・ニュータウンの公共ホール。



写真7 エヴリー・ニュータウンの「ファースト・フーズ店」。



写真8 エヴリー・ニュータウンの「ピラミッド」と呼ばれる集合住宅。



写真9 エブリー・ニュータウンの集合住宅.



写真10 エブリー・ニュータウンのバス専用道路.



写真11 エブリー・ニュータウンのショッピングセンター.

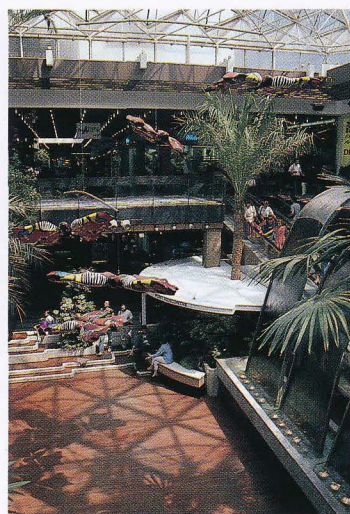


写真12 エブリー・ニュータウンのショッピングセンターの内部.

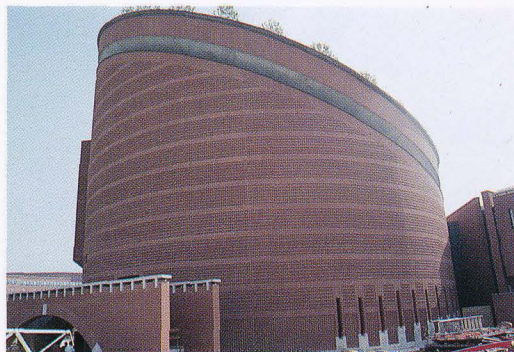


写真13 エヴリー・ニュータウンにおける建設中の大聖堂.



写真14 エヴリー・ニュータウンのヴァル・デソンヌ大学.



写真15 エヴリー・ニュータウンの住宅地区.

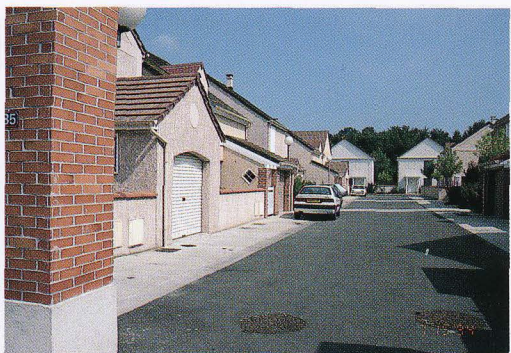


写真16 エヴリー・ニュータウンの個人住宅地区.



写真17 サンカントン・アン・イヴリヌ・ニュータウンの都心地区。



写真18 サンカントン・アン・イヴリヌ・ニュータウンの商業店舗と住宅の混在地区。



写真19 サンカントン・アン・イヴリヌ・ニュータウンのショッピング地区。



写真20 サンカントン・アン・イヴリヌ・ニュータウンの都心地区。



写真21 サンカントン・アン・イヴリヌ・ニュータウンの都心地区。



写真22 サンカントン・アン・イヴリヌ・ニュータウンの池を伴った住宅地区。



写真23 サンカントン・アン・イヴリヌ・ニュータウンの個人住宅群。



写真24 サンカントン・アン・イヴリヌ・ニュータウンの工場地区。



写真25 マルヌ・ラ・ヴァレ・ニュータウンの首都圏
急行（R.E.R.）の駅前。



写真26 マルヌ・ラ・ヴァレ・ニュータウンのオフィ
ス地区。

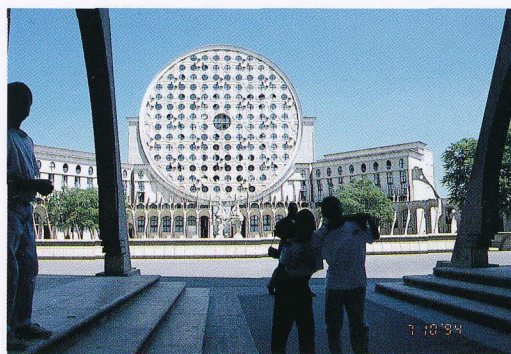


写真27 マルヌ・ラ・ヴァレ・ニュータウンの「ピカ
ソ・アリーナ」（「カマンベール」とも呼称さ
れる）集合住宅。



写真28 マルヌ・ラ・ヴァレ・ニュータウンの集合住
宅。



写真29 マルヌ・ラ・ヴァレ・ニュータウンの集合住宅。



写真30 マルヌ・ラ・ヴァレ・ニュータウン内に建設された「ユーロディズニーランド」の入口。



写真31 セルジー・ポントワーズ・ニュータウンの都心地区。



写真32 セルジー・ポントワーズ・ニュータウンの都心地区。



写真33 セルジー・ポントワーズ・ニュータウンのショッピング地区の入口。



写真34 セルジー・ポントワーズ・ニュータウンのオフィス地区。



写真35 セルジー・ポントワーズ・ニュータウンのセヌ川沿いのオープンスペース。



写真36 セルジー・ポントワーズ・ニュータウン内の公園。



写真37 セナール・ニュークウンの市役所.



写真38 セナール・ニュータウンの個人住宅群.



写真39 セナール・ニュータウンの住宅地区.



写真40 セナール・ニュータウンに残された未開発地.